

ラグビーワールドカップ 2019 カウントダウン

公益財団法人ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会

報道戦略長 松瀬 学

一生に一度の“夢舞台”が日本に

「一生に一度だ」。そんなキャッチコピーのビッグイベント、ラグビーワールドカップ(RWC) 2019 日本大会がやってくる。日本ラグビー界の至宝、五郎丸歩選手(ヤマハ発動機) はぼそっと漏らした。「まさか日本にくるとは思っていませんでした……」。

そうなのだ。ラグーマンにとってはもちろん、ラグビー関係者にとっても、夢のイベントである。サッカーに遅れること 57 年。ついに 1987 年に第 1 回大会がニュージーランド & オーストラリアでキックオフされ、これまで 8 度の大会が開かれてきた。

ただ日本では、いやアジアでは、初めての RWC となる。ニュージーランドやオーストラリア、南アフリカ、イングランド・スコットランド・ウェールズなどの伝統国以外では初めて。つまり世界のラグビー界にとっては極めてチャレンジングな大会なのだ。

世界三大スポーツイベントといえば、夏季オリンピック、サッカーワールドカップ、RWC である。うち 2 つのイベントがひとつの国で連続して開かれるのも世界で初めて。

大会中は、前回イングランド大会と同じ程度の約 40 万人の外国人が来日すると予想されている。イングランド大会の観客総動員数は過去最高の 247 万人を記録した。RWC2019 組織委員会の嶋津昭事務総長はこう述べている。「前回のイングランド大会を収益、観客動員などで“レコード・ブレイキング”な大会とすれば、日本大会は“グラウンド・ブレイキング”な大会と位置付けています。ラグビーをアジアに、そして世界に広げる契機となる大会にしたい」。

奥克彦さん、平尾誠二さんの思い

RWC 日本大会は、多くのラグビー関係者の夢だった。例えば、2003 年 11 月、イラクで凶弾に倒れた外交官の奥克彦さん(享年 45)。早大ラグビー部の筆者の憧れの先輩だった。秩父宮ラグビー場そばの古びた居酒屋で人生を教えてもらったことがある。

その奥克彦さんが RWC の日本開催を言い出し、早大ラグビー部の大先輩にあたる森喜朗総理(当時)に日本招致を熱く訴えたという。情熱は人を動かす。その思いは紆余曲折を経て、日本ラグビー協会の町井徹郎会長(04 年没、享年 69)を動かし、会長を継いだ森さんご自身が招致活動の先頭に立つことになった。これも運命か。

日本ラグビー界は 05 年、RWC2011 年大会の招致に失敗する。日本など新興国の理事は 1 票に対し、伝統国のそれは 2 票をもつという理不尽な理事会の投票方法に屈した。オリンピックを主催する国際オリンピック委員会(IOC)や国際サッカー連盟(FIFA)とは違うのだった。フェアではない。

国際ラグビーボード(IRB、現ワールドラグビー)の会長に対し、森さんは招致失敗直後、アイルランド・ダブリンの IRB 本部で、こう抗議したそうだ。「ラグビーの面白さはボールを展開することじゃないか。日本にもボールをパスしてください」。

日本ラグビーは RWC 招致に再チャレンジする。経験は宝である。招致失敗を糧として日本と理事たちの信頼関係は強まり、いわゆる“ロビー活動”も戦略的になった。16 年東京オリンピック・パラリンピック招致活動も、RWC 招致にプラスに作用した。

ここで妙案が生まれた。RWC の 15 年大会と